

2010「東ティモール・フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅」報告集

NPO 法人ほっかいどうピーストレード

はじめに

2010 年 8 月 28 日～9 月 5 日、パルシック主催「東ティモール・フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅」が開催されました。

「ほっかいどうピーストレード」(以下 HPT) では、北海道からでも参加しやすいように、今年は、新千歳空港発・台北経由の中華航空で行き、パルシックとバリ島で合流するツアーを組んだので、ぐっと便利になり、HPT 会員 5 名が参加することができました。越田清和・HPT 事務局長(以下コッシー)、八木田道敏さん(ヤギさん)、熊谷明史さん(クマ Dr)、私の中高年飲兵衛 4 人組に、クマ Dr の娘さんの熊谷有理さん(ユウリさん)です。HPT から恒例のバレーボールとサッカーボールを、釧路で「マウベシ珈琲」を販売してくれている薬局から集落の小学校へ 200 本のボールペンを、お土産に預かりました。

私は 2007 年、2008 年について 3 回目の参加です。コカマウ(マウベシ群コーヒー生産者協同組合)で行っている加工作業は大変な手間がかかりますので、HPT で販売している「マウベシ珈琲」が高い評価を得ていることを、直接伝え、エールを送り続けたいと思ったからです。

ここでは、東ティモール国内での第 1 日目(8 月 29 日)から第 5 日目(9 月 2 日)までを、日にちごとに参加者が分担して、報告いたします。

スケジュールと担当者・報告番号は以下の通りです。(荒井久代)

日付(曜)	時間	行程	担当・報告番号
8 月 29 日(日)	PM	ディリ着～オリエンテーション ディリ泊	荒井 ①
8 月 30 日(月)	AM	研修会(東ティモールの歴史)	荒井 ②
	AM	市内観光	熊谷有理 ③
	PM	マウベシへ移動 マウベシ泊	〃
8 月 31 日(火)	AM	マウベシからロビボへ移動	熊谷明史 ④
	PM	生産者宅にてインタビュー ロビボ民泊	
9 月 1 日(水)	全日	コーヒー収穫手伝い～交流会 ロビボ民泊	荒井 ⑤
9 月 2 日(木)	AM	コーヒー加工作業手伝い	八木田 ⑥
	PM	マウベシへ移動～交流会 マウベシ泊	
9 月 3 日(金)	AM	マウベシからディリへ移動	なし
	PM	現地 NGO 訪問 ディリ泊	
9 月 4 日(土)	AM	コーヒー加工場見学～空港へ	なし

■ディリ——治安の安定と貧富の格差

バリ島のデンパサール空港から 2 時間、眼下に美しい海岸線と珊瑚礁が広がり、メルパチ機は東ティモールの首都ディリに到着。強烈な日差しと乾いた空気に包まれました。事前情報で乾期には珍しい長雨にたたられ、マウベシではパーチメントの乾燥に苦労されていると聞きましたが、もう雨はやんだようです。

空港には、パルシック東ティモール事務所の伊藤淳子さん（以下淳子さん）が笑顔で出迎えてくれ、マイクロバスとバンが用意されていました。今年は明星大学女子学生 5 名を含めて参加者 17 名+東京事務所スタッフ 1 名、総勢 18 名ですから、パルシック車では乗り切れないのです。2 台に分乗してパルシック事務所に向かいました。

町は、2 年前に比べて、バイクや新車が少し増えた印象です。色を黄色に統一したためか、タクシーも以前より目に付くようになっていました。沿道の家々や商店は少しずつきれいになり、青い屋根の大統領府も 2009 年新築で、大型のショッピングモールも建設中でした。

そんな中で、一番違いを感じたのは治安のよさです。海岸では海水浴する子どもたちやのんびりと散歩するカップルなどを見かけました。2007 年も 2008 年も少なからず事件があり、ぴりぴりとした雰囲気がありましたが、今はゆるやかな空気が流れています。大きな変化です。事前配布資料『パルシック 2009 年度活動報告』に、国連は警察権を東ティモール国家警察（PNTL）に委譲しつつあると書いてありました。そのためか、国連関係の車は非常に減っていました。2008 年、マウベシで、国連警察と地元警察がペアでやってきて、ツアー参加者全員の写真を撮らせると言われたことを思い出しました。政府は治安の維持安定を最優先課題にしてくれたのかもしれません。

パルシックの事務所は 2008 年の所ではなく、少し手狭な所に移転していました。物価上昇のあおりで家賃が倍に値上がりし、引越せざるを得なかったそうです。

淳子さんによると、石油収益を利用した開発政策



今年はマイクロバスで移動



真新しい大統領府



黄色に統一されたタクシー

で建設や道路工事などが増え、火力発電所も 2 ヶ所建設中です。職を得られた一部の東ティモール人がお金持ちになり、購買力も上がり、スーパーでは品揃えが充実し、物価が値上がりしたそうです。09 年度の国家予算は公務員給与だけで前年比 94% 増で、月 600 ドルだった国会議員の給与が月 2500 ドルと 4 倍以上になり、突如富裕層が生まれたとか。一般のコーヒー農家の年収が 200 ドルくらいですから、雲泥の差です。失業率が改善されたわけではなく、大学新卒者の 21% が就職できず各地でデモが行われているという情報もありました。格差が広がっているなかで、今後どうなるのでしょうか。

■ パルシック事務所でのオリエンテーション

パルシック事務所の庭でオリエンテーションが行われました。淳子さんはエルメラ県のロブスタコーヒーの出荷で多忙のため、マウベシにはクリスさんとトウシャさんというパルシックスタッフが同行することになりました。名前は外国人のようですが、若い日本人女性です。2007 年のツアーで淳子さんの通訳と要所要所のコメントが非常に勉強になったので、一緒に行けないのは残念ですが、お二人ともティトン語が堪能で優秀な方でした。



伊藤淳子さん（右から二人目）

この時期、コーヒーの収穫が終わっている集落が多く、民泊は収穫中のロビボという今年からコカマウに加わったグループになりました。13 世帯が加わっているそうです。1994 年に建てた茅葺住居と高床式住居を開放してくれるそうです。スタッフも加えると総勢 20 名。繁忙期でもあります。準備が大変なのではないかと、心配になりました。

続いて淳子さんから組合活動など、次のような報告がありました。

パルク（2008 年、民際協力事業とフェアトレード部門がパルシックとして独立）は 1999 年 9 月から東ティモールの緊急支援を開始しました。2002 年に独立しましたが、独立後の経済的自立が難しいことが予測されたため、同年よりコーヒー生産者支援を開始しました。コカマウの活動は、唯一の産業であるコーヒーを自分たちの手で加工し付加価値をつけようと 34 世帯で始まりました。慣れない中で、初めて購入した果肉除去機が実はトウモロコシ用だったというアクシデントもありましたが、6.5 トンを ATJ に出荷しました。2004 年には組合の規約作りを行いました。役員 5 名、監査 3 名、事務局スタッフ 2 名を選出しました。

当初より組合の自立を目指してきましたが、2008 年から、パルシックは加工機材の提供のみ行い、他は組合が管理・運営するようになりました。2010 年に立てた大きな目標は、

パーチメント 60 トン以上の出荷と、政府に正式に組合として認めてもらうこと、法人格の取得です。2009 年は裏作年なので 45 トンでしたが、2010 年は 60 トンを予測しています（どちらもパーチメント）。コカマウには、今年 2 集落が加わり、11 集落、211 世帯が加入しています。400 世帯加入と 100 トン出荷を長期目標にして、毎年 2 集落ずつ増やしています。

2009 年、パルシックでは、マウベシ以外の生産者組合との交流を図りました。コカマウとエルメラ県のサココ組合との交流も行いました。コカマウはサココから組合活動意識の高さなどを、サココはコカマウから台切りや苗床作りなどを学びました。

女性グループ活動では、2010 年 6 グループができ、4 グループが具体的な生産活動に入っています。空豆や大豆の加工品、蜂蜜の販売を始めました。ディリの 11 店舗で販売し 1 袋 1 ドルの空豆が月 300 袋くらい売れています。卸値は 1 袋 60 セント。生産者の女性には 20 セントが渡ります。月 8 日間の加工作業で 25 ドルになります。豆はやや高めなので主に在留邦人が買ってくれています。マーケティングは現在、パルシックが行っていますが、将来は女性リーダーにやってもらいたいと思っています。

質疑応答では、組合がパーチメントを 1 kg 2.1 ドル（組合以外の一般価格は約 1.4 ドル）で購入し、内 20 セントが組合費に、1 ドル 90 セントが生産者に渡ること、2007 年に有機認証を取得したが、経費がかかるなどでフェアトレード認証取得の予定はないこと、脱穀場を建設するには 5 万ドルかかること、牛 1 頭が 250 ドルから 900 ドルに値上がりしたこと、等などを聞くことができました。みんなで空豆を試食し、日本のお土産に購入しました。オリエンテーション後はホテルに帰り、夕食はお鍋を囲み、交流会を行いました。

■夜の野外コンサート——シャナナさんとのラッキーな出会い

夕食後は、明星大生はディリでは夜間外出を自粛していましたので、その他のメンバーで、住民投票記念日前夜祭のコンサートに繰り出しました。政府庁舎前の広場にはステージが設営され、大勢の市民が集まっています。音楽に合わせてプレスリー（古い！）並みのオーバーアクションで踊っている 3 歳～4 歳位の子どもたちがとても上手で、笑えました。女性歌手が登場したときは、マッチョな国なのにとちょっと感動。淳子さんが、シャナナ・グスマン首相がいることを教えてくれました。シャナナさんはビデオ撮影に徹していましたが、大柄でハンサム、オーラを放つ、目立つ方でした。そのうち壇上に上がり、会場の声援に包まれていました。国民的英雄なのですね。（このラッキーな出会いは翌日も続き、ランチに寄ったレストランでもシャナナさんが隣の席に！）

コンサートには、映画『Balibo』の主題歌などで人気のエゴ・レモスさんの歌を聞きたくて行っただけなのですが、なかなか始まりません。翌日の予定を考えて断念し、10 時過ぎに会場を後にしたのでした。このような催しが開催されるには、治安の維持安定があってのことでしょう。いろいろあるのかもしれませんが、感慨深いものがありました。

Photo@Hisayo Arai（伊藤さんの写真は@Yuuri Kumagai）

東ティモールツアー報告②第2日目 2010年8月30日(月) (荒井久代)

ツアーでは、8月30日(月)午前は、「住民投票記念式典見学・市内観光」と並行して「東ティモールの歴史を学ぶ」というプログラムが用意されていました。主に明星大生対象でしたが、HPTは2班に分かれ、私が聴講しました。以下はその概要です。メモを頼りにまとめたので、不確かなところも多く、引用等、ご遠慮ください。

研修会・独立に向けた学生レジスタンス運動の歴史(概要)

学生組織「RENETIL」元代表 ジョゼ・アントニオ・ネベスさん

(通訳: パルシック東京事務所・伊藤文さん)

東ティモールは16世紀からポルトガルの支配を受けてきましたが、1974年、本国でクーデターが起こり、一気に独立の気運が高まりました。この1974年以降のレジスタンス運動について、お話したいと思います。



抵抗運動史を語るジョゼさん

■インドネシアの侵略とレジスタンス運動

1974年のポルトガルの政変により、アンゴラやモザンビークが独立するなかで、東ティモールも独立か否かの選択を迫られました。

東ティモールの3つの政党は、①フレテリン(東ティモール独立革命戦線)は共産主義の即時独立派、②UDT(民主連合)は25年間の期限付きでポルトガル連邦政府の下にいる、③APODETI(ティモール人民民主主義協議会)はインドネシアと併合するが、住民投票で決定する、という考えでした。どれにするかなかなか決定できませんでした。

1975年8月10日、UDTがフレテリンに対してクーデターを起こし、政党同士の闘争が始まり、1975年11月まで、3ヶ月続きました。1975年11月、フレテリンが全国を制圧し、東ティモールの独立を宣言しました。しかし、それを認めないとする隣国のインドネシアが、1975年12月、軍事侵攻を開始しました。独立派のフレテリンとフレテリンに統治されていた軍の人たちはジャングルへ逃亡し、こうして、レジスタンス運動はジャングルの中から始まりました。

1976年7月17日、インドネシアは一方的に東ティモール併合を宣言しました。西ティモールに逃げていたAPODETIやUDTはインドネシア軍に組織されました。国連やポルトガルはインドネシアによる併合を認めず、住民自決権を要請しましたが、インドネシア軍はレジスタンス運動を厳しく弾圧し続け、多くの人が殺され、投獄されました。フレテリンの最高指揮者ニコラウ・ロバト氏も射殺されました。



2007年シャナナ資料館の展示写真

レジスタンス運動の組織には、①ジャングルを中心とした軍の活動、②都市での地下活動、③外国からの運動（ラモス・ホルタ氏がリーダーシップをとり、人権、自由、独立を国際社会へ訴えた）がありましたが、シャナナ・グスマン氏が団結を訴え、CNRM（東ティモール民族抵抗評議会／その後、CNRM から CNRT と名称変更）が結成されました。

レジスタンス運動は、独立まで、20年以上も続いたのです。

■学生と青年たちのレジスタンス運動

1985年頃、独立への地下活動のムーブメントは、インドネシアで学ぶ学生にも広がりました。1988年、バリのデンパサールで「RENETIL : Resistencia Nacional dos Estudantes de Timor-Leste」という学生運動の組織が立ち上がりました。10人のティモール人学生で始まったこの運動は、ジャワやジャカルタ、カリマンタンにも広がり、多くの学生が参加しました。当時、インドネシアでは300～400人のティモール人学生が学んでいました。

この学生運動の目的は、①インドネシアで学ぶ学生をインドネシアの政治から遠ざける、②東ティモール国内でのインドネシアの人権侵害の状況を国際社会に訴える、③東ティモール国内に戻ったときのリーダーになる準備をすすめるということでした。国内、海外、インドネシアでのレジスタンス運動、この3つをつなげることも役目の一つでした。

私は1986年から1988年、ジャワ島のマランで学んでいました。RENETILでは主にマランを担当していました。1989年、ディリで1年間、抵抗運動を行い、1990年、再度マランに戻り、デンパサールやジャワで地下活動の組織化をしました。1991年、インドネシア国軍の住民虐殺事件「サンタクルス事件」が起こり、多くの学生たちも逮捕されました。RENETIL代表（当時）のフェルナンド・ラサマ氏（現国會議員）も逮捕されたため、1992年～1994年、私が代表を務めました。その後、私は1994年に逮捕され、1997年まで獄中にいて、釈放後、運動に戻りました。1998年6月には、活動を外に広げるために、ジャカルタで大規模なデモを行いました。デモによるムーブメントはインドネシア各地に広がりました。1998年12月、ディリに戻り、他の地下活動の人々と協力し、住民投票まで活動を続けました。住民投票直後はインドネシアの弾圧から逃れるため1か月山に逃げていましたが、またディリに戻り人道援助など行いました。

■ 主な Q&A

Q：インドネシアにいた 300 人～400 人の学生のほとんどが、RENETIL に参加したのか？

A：必ずしも全員が加わったわけではありません。自分に危険を感じる人は参加しませんでした。地下活動なので、メンバーになるためには、いくつかのステップや規範がありました。口外しないなどの誓いも必要でした。メンバーは普段は普通に生活しているので、メンバーにならなければ誰がメンバーかわかりませんでした。

Q：どのように活動していたのか？

A：小グループにわかれ、それぞれにリーダーがいた。リーダー同士は知っていました。

Q：裏切ったりする人はいなかったのですか？

A：メンバーになるには宣誓の儀式があり、カップに十字架を入れて、ワインを注ぎ、全員で回し飲みをするので、それを裏切ったりすることはできなかった。団結は保たれていた。

Q：どんな活動だったのですか？

A：①インドネシアの学生運動と東ティモール国内の運動との関係作り、②デンパサールの活動を都市部の多いジャワにも広げること、③最終的に東ティモール大学生のすべてに運動を広めること、④海外で活動するグループと RENETIL をつなげること、⑤インドネシア人で自由化・民主化をすすめるグループとの連携、など行った。

RENETIL の活動の成果は、①ディスカッションをしてインドネシアでの活動をすすめる、インドネシア人の中にも理解を得られたこと、②東ティモールの現状を国際社会にひろめたこと、③声明文や発行物などでアムネスティや NGO にアピールしたこと、その国際的な反応を国内指導部へ返すという双方向の活動をしたこと、④在ジャカルタのイギリスやポルトガルなどの大使館へデモをして海外へ訴えたこと、など。また、インドネシアに逃亡した活動家をかくまって亡命を手伝ったりもしました。

Q：集会やデモをして逮捕される心配はなかったのですか？

A：いつも隠れていたのでは活動はできない。インドネシア政府に目をつけられた人を守る運動もしていました。

photo@Hisayo Arai